

〔書 評〕

滝沢秀樹著『鏡としての韓国現代文学』

裴 龍

著者からの書評の依頼を「快諾」してしまったことを後悔さえしている。「読みたい」という願望があつてのことだが、それにしても今回は大変なことを引き受けてしまった。本書を読み進むに連れて、これは「蛮勇」をはるかに超越していたことに気づかされた。奇しくも著者は本書の中で「批評の対象となっている文学作品それ自体を知らないまま『批評を批評』するのは困難であるばかりでなく、知的誠実さを欠いた行為にさえなりかねない」(p.155)と指摘している。私は、今まさに「知的誠実さを欠いた行為」の真只中にいることを、まず告白せねばならない。この「書評」のバランスの悪さ、「混乱ぶり」が上の事情によるものであることを了承して頂きたい。

弁解ととられても仕方がないが、本書を正確に批評できる人物が現在の日本に、それも日本人の中に、何人いるだろうか、と考えてしまう。その語学力もさることながら、それほど著者の「守備範囲」は広い。すべての読者が、著者を知る人々が、著者の尽きることのない「コリアへの関心と興味（‘サラン’と言い換えた方が適切か）」が、今なお拡がり続けていることを改めて思い知らされるであろう。本書は、著者の知的作業が圧倒的な語学力によって支えられていることを証明している。著者の語学力は周知のところであるが、それでも、ネイティブではない著者が韓国の文学作品を原文で読んで「面白い」（それも分析対象ではないから）(p.51)と言い切ることの「半端ではない」凄さは、読む者を圧倒する。

全体像と個別分析をしっかりと組み合わせるという著者の手法は、本書においても例外なく貫かれている。著者の韓国文学への「動機」を明らかにすべく「韓国現代史の諸問題」から入り、「対談」において著者の「韓国文学への系譜」を明らかにしている。「動機と系譜」を明らかにするという「前半」作業を通して読者に本書を読み解く「材料」を提示し、その後の「後半」において著者がとくに関心を持った様々な作品を、著者独自の問題意識で分析（とくに関心を持った、と言うには作品が多すぎるが）して見せている。著者はそれぞれの作品を時代、ジャンル、作家などあらゆる角度から系統的に分析・理解することに主眼を置いており、その目的は見事に達成されている。後半部分は韓国文学や歴史に関して相当の知識が要求される難解なものであり、最後の「言いたいことが、より直截に表現されている」エッセイは読む者を安心させてくれる。最後のエッセイは別にして、前半と後半とで「読み易さ」にかなりの差があるのは否めないが、それは「発信先の違い」に

起因するものであろう。

著者の、互いにしっかりと関連付けされた視野の広さと問題意識の明確さは本書でも力強くその位置を確保しており、それは当然膨大な「基礎作業」に基づいている。本書に登場する韓国の文学作品は著者の言う「現代」、いや一般的な「くくり」というものからも逸脱している。そこには朝鮮解放前の李光洙や尹東柱が登場し、朴景利の『土地』や趙廷来の『太白山脈』と言ったいわば骨太の大河小説も出てくる。一方で馬光洙の『子宮の中へ』やチョン・ジョンヒの『オレンジ』といった「別次元」の作品までもが登場する。これだけを見ると、いかにも「乱暴すぎる」と感じるかもしれない。しかし、著者の妻さは、それらの作品が、「ただ出てくる」というだけでなく、それぞれが分析対象として全体の中に位置づけされている、というところである。

本書を読み解く上で重要と思われる部分を、筆者なりに提示して見たい。下の二つの文章は、著者の「韓国文学への動機」と「判定基準」に関する箇所であるが、本書を貫く重要な部分であると思われるので、引用したい。

「私の韓国研究は、次第に経済成長の過程での社会変動、特に階層間の葛藤、新しい変革主体の形成、というところに焦点を合わせるようになって行きます。(中略) 韓国における階級・階層の問題を、激しく進む工業化と都市化と関連付けて理解すること、それが民衆運動と政治的民主化とどう関係するかを考えることが、中心的課題でした。」(p.53)

「“日本人として韓国文学を見る視覚”と言えば、当然に見る視覚自体に一定の“バイアス”があることを前提とする。(中略) 韓国の民主・民衆運動の観点からはとりたてて内容のない作品であっても、そのなかに韓国社会のある実相を見せてくれる内容があれば、その意味では大変“面白い”作品であり得るというわけである。言ってみれば、固有の文学的リアリティーを語る以前に、社会の実相をどの程度あらわしているのかというリアリティーが関心の対象になるのである。」(pp.100-101)

筆者が特に重要なキーワードとして捉えているのが二番目の文章の「リアリティー」という言葉である。著者は「関心」という言葉を使用しているが、この「リアリティー」こそが、著者の「韓国現代文学」に対する「判断基準」となっている。上の二つの文章の関係について言えば、著者が「リアリティー」という判断基準を選んだ理由が一番目の文章ということになる。あくまでも自己の課題に向き合い、そこからキーワード＝「基準」を導き出す、という手法は、著者の膨大な作業に基づいているからこそ説得力を持つのだといえよう。

「黒白論理」や現実に基づかない「極端な描写」に疑問をもち、鋭い指摘を投げかける著者のスタイルは、著者本来の研究スタイルと共通する。ただ単に民衆の生活を描いたから良い、ということではなく、そこにどれだけ「社会の実相」が描かれているかをより重視する。李東哲の『アリラン共和国』(pp.110-112)、李文烈の『英雄時代』(pp.121-122)

など、「面白い」と感じた作品であっても、その中の「リアリティー欠如」を見抜く鋭さは、著者の関心が純然たる「文学世界」にのみあるのではなく、「歴史としての韓国現代」にあることを如実に表している。

韓国社会の「社会意識」を持つ作家として、黄皙暎や趙廷来ではなく、李文烈をあげた (p.258) ことは著者の基準が、「運動圏寄り」だったり、作家の「活動歴」といった狭小なそれではないことを物語っている。著者の李文烈作品 (ここでは『辺境』) に対する評価は、(多くの人がそうであるように) 必ずしも明確ではないし、その評価は作品に対するものなのか、作家自身に対するものなのか、分かりにくいという点もある。しかし、その「灰色」と言われる李文烈の背負った「分断」と描写における「リアリティー」、言い換えれば李文烈の中に見える「冷笑」と作品に対する「熱意」といった一見矛盾する現象に、著者は複雑に交差する韓国現代史の「リアリティー」を感じているのではないだろうか。李文烈に対する「…歴史形成の、自らの人生形成の主体としての意識を霧散させ、社会と人生に対する冷笑と虚無意識を拡散させる結果を、むしろ意識的に追及しているのではないかという疑い」(p.264) は、著者の韓国認識の「複雑さ」とは決して無縁ではないのであろう。また、著者の基準と評価の鋭さは、韓国大河小説の最高傑作と評される『土地』や、崔明姫渾身の遺作である『魂の火』を、そこに描かれた民族と民衆のリアリティーで評価し、その評価をもって「民族文学」の系譜の中に位置づけたことに克明に表れている。

しかし一方で、その「判断基準」が往々にして「ぶれる」のもまた著者の「魅力」である。著者個人の「思い入れの部分」をどう見るかは読者個人の判断に任せるしかないが、筆者としてはその「ぶれ」が著者の鋭い洞察力を多少曇らせている、と感じることもある。「受け取り方の問題」と一蹴されてしまいそうだが、『ニム』や『コピッ (手綱)』などで疎外されている者 (とくに女性) の「許しがたい現実」を見事に描くことで現代韓国文学を代表する女性作家となった尹静慕であるが、その『悲しいアイルランド』の展開を「衝撃的」、「新鮮」(p.91) とする著者の評価などは、尹静慕という作家への「思い入れ」が「評価」に「ぶれ」を与えたように感じる。金正賢の『アボジ (父)』の「リアリティーの欠如」を指摘する著者が、なぜ「‘ショーン’の中国行き」には「リアリティー」を感じるのであろうか。時代の様変わりとともに、尹静慕自身の「主題への意識」に何らかの変化が生じているのではないか、という「一読者の疑問」に著者はどう答えるのであろうか。

ただし、著者の「ぶれ」は本書の価値そのものに影響を及ぼすものでない。前半の『対談』の中における金美善氏の「韓国語を美化しすぎ (愛情を持ちすぎ)」(p.89) という指摘は、本書に貫かれている著者の「癖」を指摘する言葉として、たしかに鋭い。金氏が指摘する著者の「癖」(これこそが著者の魅力でもあるのだが…) は単に「言葉への愛情」と言うだけのものではない、と見るのは深読みしすぎであろうか。李光洙や黄皙暎などの作品への評価と作家の活動や功績などを分けて冷静に評価すべきであるとの指摘、尹東

柱などの作品を「素直に」読むことが大事であるとの指摘（いずれもp.74）に対して一度は同意しながらも、「親日行為を反省し、筆を断つ」ことを表明した崔南善に「共感を覚え」てしまう（p.78）著者の感覚は対談者の指摘と質問を「超越」している。このことは、著者の韓国文学への「動機」が「難しい文言で規定された学問上の動機」のレベルをすでに飛び越えていることを自ら告白しているに等しい。著者の問題意識は、文学作品を、それ自体の作品性よりも、作家の「ある到達点」に至るまでの一つの段階として認識することに向いているようである。それは、「社会」というものを「対象」にする著者の「本能的捉え方」の当然の結果であり、その意味においては「専門ではない」とする著者の「ことわり」は正しい。

詩文学に対する「素直な読み方」（p.75）に関する、著者の「同意」は「条件付」であろう。日帝時代も解放後もその後の軍事独裁時代にも、人々は「何かを必死に読み取ろう」としていたのではないかと筆者自身うまく表現できないことでもどかしいのだが、多くの強制とタブーの中で、文学作品の小さな表現の中に「一筋の希望」を見たいと願った結果が、韓国における「ひねくれた読み方」を「完成」させてきたのではないだろうか。専門家の批評や分析は別にあるが、「ひねくれた読み方」が、韓国が辿ってきた道と強く結びついているものであるということは、著者も当然知るところであろう。

全体を通じて筆者が持った「印象」なのだが、本書には「受け手側の必然性」への言及が少ないように思える。韓国の現代文学作品をその時代、ジャンル、作家の性別ごとに系統的に把握し、伝えようとする強烈な意識は十二分に伝わるし、成功しているが、それらがなぜ社会に受け入れられ、「作品」としての地位を確立することができたのかということに関してはあまり語られていない。本書が「著者自身の受け取り方」を中心に展開されているという「受け取り方」をされる恐れがある、と感じてしまうのは、筆者の勝手な「杞憂」であろうか。

韓国文学に対する著者の優しい眼差しは、専門分野との関連となると一気に厳しさを増す。その真骨頂は、「歴史研究と歴史文学」という題で収められたわずか15ページの文章に凝縮されており、今一度読み返して見て、改めてその認識と展開の鋭さに驚嘆させられる。文学を専門としない著者がなぜ韓国文学を読み続けるのか、という問いに対する「十分かつ明瞭な答え」にさえなっている。「目的意識に自覚的であることこそが、社会科学的認識の客観性を保証する」（p.143）という「警鐘」は、流行に左右されがちなアカデミアへの著者のメッセージであろう。「実感と事実の乖離」（p.153）を認めた上で、その乖離を埋めるための意識的努力と作業が必要である、とする著者の「持論」の中に、研究対象に対する「暖かい眼差しと冷静な態度」が均衡を保ちながら存在している。

『未忘』や『太白山脈』といった作品で、農地改革などの〈事実への実感〉を浮上させ、それを「第一次資料の厳密で緻密な分析」結果である〈事実〉にぶつける手法は、まさに本書における著者の真骨頂と言える。〈実感〉を軽視しない著者の姿勢は、いかなる場合においても常に〈人間・民衆〉を意識の中に取り込んできた証であり、方法としてのひと

つの到達点であろう。著者ほどの明確さはないにしても、筆者の考えは著者に圧倒的に近い。ただ、歴史、文学の分野を問わず、南北コリアを支配してきた（いや、現在でも）数多くの「タブー」や「実感（主観）」がある種の「閉塞感」を生み出し、それこそが現在の論争を活性化させる皮肉を演じている、と感じるのは筆者一人ではないはずである。

著者は本書に綴られている内容をどこに向けて発信しているのだろうか？著者が語る、韓国文学の「知名度」が韓国における日本文学のそれとかけ離れていることへの「不満」（p.156）からすると、「日本」ということになるのであろう。韓国社会を「分析対象」とする著者が、一次資料の検討だけでは気づくことのない「対象の実相」を提示してくれる韓国現代文学の面白さを伝えたいと思うのは、至極当然と言えよう。しかし、本書の内容は日本における韓国文学の現状を陵駕している。言い換えれば、「韓国文学のすばらしさを日本に紹介したい」という「紹介」のレベルを超えている。問題は、韓国文学の面白さを発信するだけでは著者自身の知的好奇心を充足させることができない、というところにある。繰り返すが、著者の知的好奇心とそれを充足させるための作業は「実相を見せてくれるもの」などという「動機」や「基準」すらをも意味のないものにしつつある。それらの「枠組み」を突破して、著者の言うとおりの、「（文章表現の面白さそのものを）楽しむという側面がだんだん強くなって来ている」（p.51）ということは、本書においても十分知り得るところであり、それこそが本書の「難解さ」の根源である。

『鏡としての韓国現代文学』という題名が現すとおり、本書の目的はあくまでも文学に映る韓国社会であり、その内容と試みは意義のあるものとして評価されるべきである。しかし、この先に著者が見ているもの、目指すところはどこであろうか。あくまでも「枠組み」を重視しつつ、「実相」を見ることだけで、著者が満足するとは到底思えない。著者の真のねらいは、「当初は研究対象」であった韓国現代社会への理解に止まらず、韓国の「情緒（‘恨’と表現しようか）」を自己の中に「取り込みたい」（理解したいではなく）と言う知的願望の充足ではないだろうか。本書は、そんな著者の「ねらい」が現実的可能性を帯びてきているのではないか、と思わせる一冊である。

この「書評」には専門家ではない（かといって「素人」とはいえない）という著者の書を素人である筆者が「批評」するという根本的な問題が存在している。ここで触れられていない箇所は、ただ単に筆者の力が及ばなかったという単純な理由であることを付記しておきたい。つまらない感想だろうが、一読者としては韓国文学に対する興味というか関心を刺激された、と素直に告白するしかない。

最後に、力不足を承知で筆者に貴重な機会を与えて下さった滝沢秀樹教授とつたない「書評」の掲載を許して下さった関係者の方々に、感謝申し上げたい。

（2003年4月19日）

（御茶の水書房、2002年10月、xiii + 295 + 7ページ）